

センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 64



巻頭言 FOREWORD

知的コミュニティとしての大学

高等教育機能開発総合センター教授 小笠原 正明

2005年度は旧一般教養課程に代わって全学教育がスタートしてから10年目、全学教育の教養科目が「コアカリキュラム」に切り替わってから5年目の節目の年度にあたる。センターの高等教育開発研究部は、かねてから教養教育の効果を正しく評価するためには、中長期にわたるアンケート調査および聞き取り調査が必要であると考えていた。

今回、「特色ある教育支援プログラム」の助成金と、教育改革室および学務部教務課の全面的な支援により、全学部4年生を対象としたアンケートおよび記述式の調査を行うことができた。この調査は、5年間隔で2015年度まで継続して行われる追跡調査の第1回目と位置づけられている。その結果をまとめた報告書がすでに全教員に配布されているが、ここでは調査結果から浮き彫りになった問題点について述べたい。

回答者約1000人の大調査

今から7年前に行われた教養教育に関する全国調査で、本学の12学部のうち4学部においてアンケート調査が行われた(注1)。当時の本学および他大学との比較を可能にするために、今回の調査ではその時のアンケート項目の一部を踏襲した。14項目の教

養教育の理念にかかわる質問は1, 2, 3, 4, 5の5段階、9項目のスキルにかかわる質問は1, 2, 3, 4の4段階で評価されている。その他に、「今も記憶している科目」「コアカリキュラムに対する意見」について自由な記述を求めた。

調査対象の全学部の4年生2776名中、アンケートに応じたものは958名で、回収率は34.6%であった。質問項目の分析にあたってはノンパラメトリックな判定法(符号検定)を用いた。5段階評価については3を、4段階評価については2.5をニュートラルな値とみなし、その値からのズレがプラスの値の場合をポジティブな反応、マイナスの値の場合をネガティブな反応とみなした。

理念にかかわる質問について、危険率1%以下でポジティブな傾向と判断される項目の例は、1) 幅広い知識を身につけること(0.659)、2) 新しいものの見方にふれること(0.648)、3) 社会問題に関心をもつこと(0.353)、4) 探求心をもつこと(0.330)、5) 価値観や社会観について考えること

(0.303) などであった。なお括弧内の数値は、得られた平均値の中立点からのズレを示している。

一方、ネガティブな傾向を示したのものには、1) 奉仕的精神を養うこと (-0.783), 2) 自分に自信を持つこと (-0.790), 3) 倫理観を養うこと (-0.305) などが目につく。

スキルに関わる質問項目については、1) ものごとを総合的に判断する力 (0.197), 2) 文章で事実や自分の考えを説明する力 (0.171), 3) 知識と現実とを結びつけて考える力 (0.159) などについてはポジティブ、1) 数理的な処理能力 (-0.239), 2) ねばり強くものごとに取り組む力 (-0.187), 3) 他人と議論する力 (-0.034) などについてはネガティブな結果が得られた。「文章を読んで理解する力」についてはどちらとも判断しかねる結果が得られた。

教育目的との整合性

調査の結果によれば、コアカリキュラムは幅広い知識を身につけること、新しいものの見方に触れることなどにおいて高く評価されている(図1参照)。スキルに関しては、総合的な判断力や文章能力の育成についてそれなりの評価が得られた。

カリキュラムの中心をなす「一般教育演習」や「論文指導」の最近の進歩には著しいものがあり、学生の評判も年々高くなっているため、現在のカリキュラムを対象とすればスキルについてはもう少し高い評点が得られるかも知れない。

コアカリキュラムは、

- 1) コミュニケーション能力の育成、
- 2) 人間や社会の多様性の理解、

3) 研究の一端に触れながら独創的かつ批判的な能力を養う、

4) 社会的な責任と倫理を身につけること

を目標としている。また、全体を通して「社会参加を促し、生涯学習の第1歩を踏み出させる」ことを目指している。

評価は個々の学生の印象によってなされているので、アンケート調査のデータだけから教育の目的が達成されたどうかを判断することはできない。しかし、教養教育をひとわり経験した学生が、その教育目的をどのように受け止めているかは推定できる。また、「印象に残った科目」などの記述欄には、コアカリキュラムが設定した目的に対するさまざまな反応が書かれているので、それらと合わせて考えると、コアカリキュラムの目的と学生の受け止め方との整合性が判断できる。

結果として、目的1)のコミュニケーション能力については「何とも言えない」、2)の人間や社会の多様性の理解については「良好」、3)の批判的な能力の育成について「何とも言えない」、4)の社会的な責任と倫理についてははっきり「悪い」と判断される。

この調査結果は、今後コアカリキュラムの内容を検討する上で、大いに参考になる。

教員としての技量は十分か？

調査データと学生のコメントに目を通して最初に感じるのは、「授業担当者に教員としての技量が十分に備わっているのだろうか」という率直な疑問である。例えば図2は、入学後ほぼ1年間の教育を受けて、

図1 「幅広い知識を身につけることに対して影響があったか」という質問に対する回答

図2 「自分に自信を持つこと」という質問に対する回答

自分に自信を持つことに影響があったと考えている学生がきわめて少ないことを示している。学生の資質を云々する前に、教育者としての技量を何とかしなければならぬと思う。大学の教員は、それぞれのディシプリンにおける研究者としては訓練されているが、教育者としては資格の賦与がなされていないということが以前から言われていた。本調査の結果は、このような懸念を裏付けるものになった。試しに、自分の授業で以下のことを実践しているかどうかチェックしていただきたい。

- ・学生に敬意を持って接しているか？
- ・威嚇や脅迫を動機付けと混同しないか？
- ・学生の名前と顔を覚えようとしているか？
- ・早い時期にクラスの習慣を作り上げ、教室に温かい活気あふれる雰囲気をつくるよう努力しているか？
- ・反対の立場の意見にも耳を傾け、質問をして、根拠のある議論を展開することにより、自分とは違うものの見方も尊重できるようにしているか？
- ・授業の要点を明確にし、納得できるような具体的な実例を与え、明快な結論に導くよう毎回の授業を設計しているか？

これは有名な「シカゴ大学教授法ハンドブック」(ブリンクリ他著、玉川大学出版部、2005)の中で教員の心構えとして繰り返し強調されている事項である。どの国の誰が見ても妥当な内容ではないだろうか？

およそ北海道大学の教員であれば、教室において学生と接する前に以上のことを「職務綱領」の一部として身につけて欲しい。

人間的なものを感じていない！

しかしもっと気になることは、奉仕的精神を養うことや倫理的なことなど、総じて人間性にかかわる質問項目に対する評価が著しく低いことである。この傾向は学部にかかわらず、おしなべて見られる現象である。教育の効果は相互作用の結果だから、このデータは学生が大学の授業に人間的なものを期待していないことを示しているかも知れない。逆に、期待していたが裏切られたということかも知れない。いずれにせよ、教育を提供する側はこれを根本的な問題として深刻に受け止める必要がある。

自由記述欄を通して読むとわかるが、学生はこのカリキュラムに人間性と総合性を感じていない。「なるほど、いろいろな学問がある、いろいろな先生がいる、いろいろな授業のやり方がある。しかし、だからどうなのか？ 何が言いたいのか？」という学生のつぶやきが聞こえてくるようである。

この傾向はわが国の大学教育に一般に見られることで、特にコアカリキュラムの欠陥とは言えないが、それで責任が軽くなるわけではない。この構造的な欠陥を克服するために、大学は全体として調和のとれた知的コミュニティであることを目指す必要がある。教養教育であれ専門教育であれ、およそ教育は「コミュニティ」感覚抜きでは成り立たない。例えば「サイエンス」は普遍的なもので、民族を超え、国境を越える性格のものと言われている。しかしその教育のためには、「サイエンスのコミュニティ」が現にあるか、あるいはバーチャルに想定されている必要がある。そのスピリットが無ければ、国境どころか自我さえも超えることはむずかしい。

これを大学入学直後の1年間を中心に行われる全学教育に引き戻して考えてみると、コアカリキュラムの戦略は、「北海道大学という知的コミュニティ」への参加を促すことによって、教育の目的を達成しようとしている(2006年度「北海道大学の全学教育」参照)。そのために、札幌農学校以来の伝統が想起され、全学支援方式の教養教育の伝統が強調されている。

本学の教養教育が実体を持ち実効性を持つためには、教員は日常的に学生の教育について議論し、検証し、教育上の矛盾を解決しなければならない。そ

の結果として生まれる大学のコミュニティが、自己にのみかかわり「個」の充足に留まろうとする学生の関心を学問や、芸術や、社会や、他者との関わりへと向かわせる。これが「高等」教育の始まりであり、入学したばかりの学生に対して大学がまずなすべきことだと思う。

(高等教育開発研究部長, 2006年3月まで)

注1: 科研費研究「大学設置基準の大綱化に伴う学士課程カリキュラムの変容と効果に関する総合的研究」代表 有本章 (広島大学)

平成17年度センター研究発表会開催される —新たなセンターの展望—

3月23日(木)12時30分より情報教育館4階共用多目的教室(2)において、センターの3研究部に加えて北海道教育大学函館校の宇田川教授による研究発表会が以下のようなプログラムで開催され多くの方が参加されました。センター研究部の活動に関心のある皆様のご来場を感謝いたします。

センター研究部は、発足以来あらゆる方面にわたり、めざましい活動を重ねてきました。この11年の間に、コアカリキュラムの研究、フィールドを利用したフレッシュマン教育・芸術科目・科学技術の倫理・初習理科教育の導入を行い、また、公開講座・キャ

リア教育の導入、AO入試の導入などの入試改革、高大連携活動、全学FD・初任者研修、TA研修の実施など、日本の諸大学のさきがけとなる企画を提案し実行しています。今年度の研究会は、過去の活動の延長として、研究部の将来構想を提案しました。

まず、宇田川教授は、17世紀以降の高等教育の歴史の中で現在の日本の大学がどのような位置を占めるかを解説し、将来に期待されるセンター像を提示しました。細川助教授は高等教育開発研究部の将来像として、各種評価の成果やe-Learningシステムを利用した活動を提唱しました。入学者選抜研究部の

加茂部長らは、ある理系学部のAO入試合格者の追跡調査から、入試で検出すべきポイントを示しました。町井教授他の生涯学習計画研究部は、キャリア教育・公開講座・全学教育・生涯スポーツの将来像を示しました。

最後に、小笠原高等教育開発研究部長が戦後の北

海道大学の全学教育の歴史を俯瞰し、その現在と将来への期待について述べました。

全体を総合すると、センター研究部の仕事はこれからも山積されており、さらなる活躍が期待されていることがわかりました。

プログラム

高等教育センターの役割	ー UC バークレーと北海道大学ー
	宇田川 拓雄 (北海道教育大学函館校)
高等教育開発研究の新展開	ー 評価と e-Learning を利用してー
	細川 敏幸 (高等教育開発研究部)
何が入学後の成績を左右するのか?	
	加茂直樹, 鈴木 誠, 池田 文人 (入学者選抜研究部)
北海道大学におけるキャリア教育のセカンドステージ	
	亀野 淳 (生涯学習計画研究部)
公開講座の新たな展開	
	木村 純 (生涯学習計画研究部)
次世代型全学教育プラン・・・University Studies	
	町井 輝久 (生涯学習計画研究部) 山岸 みどり (入学者選抜研究部)
北国の暮らしと生涯スポーツのこれから	
	川初 清典 (生涯学習計画研究部)
センターの 10 年	
	小笠原 正明 (高等教育開発研究部)

センター日誌 CENTER EVENTS, February

2月

2日	・(訪問) 登別青嶺PTA高校	16日	・(会議) 第4回今後の外国語教育在り方検討WG
3日	・(会議) 文系基礎科目科目責任者会議	21日	・(会議) 平成17年度第10回教育改革室会議
6日	・(会議) 第19回教育システム弾力化検討専門委員会		・(会議) 第27回教務委員会共通授業検討専門委員会
	・(会議) 第11回 GPA・上限設定・成績評価実施検討WG	23日	・(会議) 第29回高等教育開発研究委員会
	・(会議) 生涯学習計画研究委員会公開講座実施部会	24日	・(会議) 第36回生涯学習計画研究委員会
9日	・(会議) 第129回全学教育委員会小委員会	25日	・一般選抜前期日程入学者選抜試験
	・(訪問) 浦河高校		・センターニュース第63号発行
13日	・(会議) AO入試委員会、入学者選抜委員会	26日	・(会議) 入学者選抜研究委員会
14日	・(会議) 第6回学部教育検討WG	27日	・(会議) 第130回全学教育委員会小委員会

センターニュース 2006, No. 64 目次

<巻頭言>

知的コミュニティとしての大学

小笠原 正明…………… 1

平成 17 年度センター研究発表会開催される

-新たなセンターの展望-…………… 4

センター日誌…………… 5

目次・行事予定・編集後記…………… 6

行事予定 SCHEDULE, April - October

	【日 (曜日)】	【行事】	【備考】
4月	6(木)	新入生オリエンテーション	
	7(金)	入学式	
	10(月)	学部ガイダンス	
	11(火)	第1学期授業開始	
	19(水)～20(木)	1年次履修届受付	
	19(水)～20(木)	2年次以上履修届受付	当該学部
	20(木)	追加認定試験成績締切	
6月	1(木)	開学記念行事日	休講
	1(木)～4(日)	大学祭	休講
7月	18(火)及び25(火)～26(水)	補講日	
	28(金)	第1学期授業了	
	31(月)～8月10(木)	定期試験	
9月	中旬～下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
	25(月)～29(金)	集中講義期間	
10月	2(月)	第2学期授業開始	
	11(水)～12(木)	1年次履修届受付	
	11(水)～12(木)	2年次以上履修届受付	当該学部
	12(木)	追加認定試験成績締切	

編集後記

今から11年前、大学教育改革の幕開けが感じられるころ「センターニュース」が創刊された。行動しながら発信することをモットーに、印刷所に原稿をまわす時間を節約し、ついでに費用も節約するため、編集担当者がPMという印刷工場用のソフトをマスターして版下を作った。ガリ版刷り(今では死語だが)の新聞を発行しているつもりだった。おかげで、6ページ程度のニュースなら1日でできる腕前になった。時代は移り、ソフトが新しくなって、編集機能も格段に改善されたが、オールドボーイにはどうも使い勝手が悪い。個人的には、どうやら潮時らしい。新しい時代のニュースは、新しい人たちによって作られなければならないということだろう。妄言多謝。(杜)

センターニュース 第64号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日: 2006年3月25日

発行元: 北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854

編集委員: 小笠原正明・西森敏之・◎細川敏幸・木村純

町井輝久・安藤厚・川初清典・山岸みどり

鈴木誠・池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話: (011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ:

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>